

風の匂い

【人物一覧表】

村上 海斗(28) コンサルタント会社勤務。

石山 翠(30)(31)(32)(33) 居酒屋「煙」の従業員。村上海斗の母親。

三井 光(28)(22) 海斗の高校時代の同級生。

三井 ミク(6) 三井光の娘。

橋本 渉(28) 村上海斗の同僚。

医師(66) 練馬駅前クリニック勤務。

助手助手(38) 同右。

受付員(22) 同右。

シゲさん(60) 居酒屋「煙」の常連客。

大将(55) 居酒屋「煙」の大将。

村上三太(24) 村上海斗の弟。

三井 麻奈(23) 三井光の奥様。2022年死去。

村上樹(声のみ) 村上海斗の父。

客 A 居酒屋 煙の来店客。

店員 A 居酒屋 煙の従業員。

女性社員 A 村上海斗の同僚。

カップル男 ▶ (声のみ) 石山翠入浴時に外

から聞こえてくる声。

カップル女 ▼ (声のみ) 石山翠入浴時に外

から聞こえてくる声。

通行人少女 ▶ 鳥取空港のロータリーですれ

違う人。

通行人男 ▶ 鳥取空港のロータリーですれ違

う人。

【あらすじ】

東京・丸の内のコンサルタント会社で勤務する村上海斗は仕事が上手くいかず、自己を見失いかけていた。そんな最中、同僚の橋本渉との会話の中で、「懐かしさ」という感情が自身の原体験を問いただすきっかけになるのでは無いかと考える様になる。

2024年のゴールデンウィーク、海斗は学生時代の友人である三井光と再会を果たす。光と光の愛娘ミクの二人で玩具屋へ買い物に行き、玩具の面白さを左右する要素は対象年齢ではなく、自身のパーソナリティによるものだとして再認識する。また、三井家の家族写真を見る事で、家族との繋がりが自己に対する理解を深め、自身の嗜好性を明瞭化できるのではないかと考える。しかし、海斗は母親とは遠縁関係であった。

海斗の母親である石山翠は姑問題により海斗ら息子が小さな頃から別居状態であった。翠は母親として息子の側に居ることができな

い不甲斐なさを感じる一方で、居酒屋で懸命に働くことから得られる達成感や充実感、そして30代の女性が好き勝手に生きてもいい現実に居心地の良さを感じる人間であった。

ゴールデンウィーク後、海斗は急遽実家へ帰省する。実家の屋根裏には翠が使用していたガラケー、海斗が翠に贈った香水、そしてドレッサーが収納されていた。海斗はガラケーを屋根裏から持ち出し、過去のメール履歴を閲覧する。メール履歴には海斗の父である村上樹と翠のやり取りが沢山残っていた。履歴には海斗ら息子の成長記録が沢山書き綴られており、これらメールを閲覧することで村上樹と海斗という人間を思い出せるかと思った海斗であった。しかし、時の流れは残酷であり、メール文面内の村上樹と海斗という人間は赤の他人の様に感じた。唯一、村上樹と海斗として思い出せたことは、幼少期好んで食べていたお菓子がハッピーターンくらいであろうか。

【本文】

○鳥取県鳥取市・海辺(夕・2020年)

潮の満ち引きが穏やかな海岸。

砂浜には三井光(22)と三井麻奈(23)が座っている影が写っている。影からはどの様な顔立ちをしているのか認識することはできない。

二人が佇んでいる遥か向こうでは、水平線に向かってまさに今、夕陽がゆっくり沈もうとしている。

光「本能って大切じゃない？」

夕陽を見ながら語り出す光。

光の隣に座る麻奈は無言を貫く。

夕陽は引き続き物理に抗うようにじわじわと少し揺れながら沈んでいる。

波風によって光の上着の裾が少し靡く様が、影から見とれる。

海辺には、穏やかな波風と潮の満ち引きが響き渡る。

光は再び、沈む夕陽を見ながら

光「この匂い。久しく匂ってなくてもさ、いざ匂うと、あー、懐かしい。そういえばこの匂いだったって」

共感を得たいのか、光は麻奈の顔を再び覗き込む。

○広島県尾道市・海斗の実家・ベランダ

(夜・2024年)

実家のベランダで涼んでいる村上海斗(28)。

手すりに肘をかけ、一点を凝視するではなく、吟味する様に辺りの景色を眺める海斗。

海斗の視界の左手には少しだけ荒々しい様子の海、右手には土砂崩れの危険性がある雑木林がある。

海斗は手すりに肘をかけたまま、腕に顔を埋める。

海斗「……………」

○広島県尾道市・居酒屋「煙」・中

(夜・2006年)

「居酒屋 煙」と書かれた暖簾が店前に掛かっている。

時計の針は23時ちようどを示す。

店内は混み合った様子でいる。

客A「生3つと串焼き盛り合わせ1つ」

店員A「はいよ！生一丁、串盛り1丁」

厨房には石山翠(30)が立っており、店員Aから注文内容が記された付箋を受け取る。

焼き台にて串が焼かれ始める。

翠は汗を拭い、熱心に焼き鳥を焼いている。

厨房に煙が立ち籠る。

厨房に立つ翠の瞬きの数が多くなる。

○広島県尾道市・海斗の実家・ベランダ

(夜・2024年)

満月が煌々と輝いている。

海はひどく荒れ、雑木林から聞こえる葉の擦れた音も大きく響き渡る。

手すりに肘をかけている海斗の手には、ガラケーが握られている。

海斗は遠くを眺めながら、手元に持っているガラケーをパカパカと開いては閉じる行為を数回繰り返す。

○丸の内パークビルディング・オフィス

(朝・2024年)

ノートパソコンを目の前にブライインドタッチを行う海斗。

モニターにはワードにて議事録を作成する様が映っている。

社内連絡ツール Slack の通知が届く。

送り主は上司の星であり、文書には、PC画面「今、何の作業していますか？

議事録も大切ですが、クライアントワークの方が重要だから、そっち優先的にやって下さい」

海斗は生気を失ったような目で通知内容を確認している。

海斗は小声で文面を読み上げる。

海斗「前も言いましたけど、全体が見えてないです。スケジュール見ましたか？誰がボールを持っているか把握できていますか？分からないことあったらいつでも言ってください。社会人なのですから」

内容を確認し終えた海斗の目は変わらず生気を失っている。

生気を失った目をしながら、しばらく静止する海斗。

しばらく静止した後、海斗は現実逃避をするかの様に左隣のデスクを見つめる。

左隣の席では、同期の橋本渉(28)がオンライン会議をしている。

渉は海斗の眼差し気づいておらず、「ありがとうございます」、「とんでもないです」を海斗が見つめた10秒間で4回

も言う。

海斗は現実に戻るべく、目の前のモニターを再度見て、ため息をつく。

ため息をついた後、海斗は下唇を噛み締めながら、「申し訳ございませんでした」と小声で発し、slackに文字を打ち込む。

モニター上にはslackと先ほどまで作成していた議事録の2画面が表示されており、議事録の文書の一部には、

PC画面「議事録は明日の朝一に提出してほしい(星)」

タイプングをする海斗。

海斗「……絶対禿げてきている」

海斗は変わらず生気を失った目つきをしながら、独り言を発する。

独り言が大きかったのか、対面に座る女性社員Aが、海斗の頭頂部を見るため、少し腰を持ち上げる。

○広島県尾道市・古びたアパート・外

(朝・2006年)

朝方、自宅に帰ってきた翠。

慣れた手つきでポストを開ける。

☞ 通ほど郵便物が届いており、一つ目

は水道代の払込書、☞ つ目は近所のマ

ッサージ店の割引クーポンのハガキ、

そして☞ つ目は不在通知表である。

☞ 通の郵便物を見た翠は少し微笑

み、ポケットから鍵を取り出し、玄関

を開け、部屋へと入る。

○東京都・丸の内・焼肉店「吟次郎」・中

(夜・2024年)

金網の上に☞ 切れの肉が乗っている。

店内では海斗と渉が2人で食事をして

いる。

渉は金網上の肉を返しなが

渉「最近、うちのプロジェクト炎上気味でさ。

バッファなんて作れないわけよ。まじ、い

い加減にしてくれって話」

渉の話す内容はネガティブだが、口元はにやけている。

金網上のお肉♡切れの内、∞切れを海斗の取り皿に置く渉。

海斗「あ、ありがとう」

海斗はお酒を一口飲む。

海斗「なるほどね。でもそれで言ったらこっちも結構炎上気味だよ」

海斗の口角は下がっている。

海斗は片手にジョッキを持ち、渉の目を見ながら

海斗「知っての通り俺が今やっているのは、新規事業開発だからトライしてはエラー。トライしてはエラー、そしてまたエラーエラーエラー。終わりが見えなくて嫌になるよ。トンネルしかない。上司もあれだし」

渉は海斗の話を聞きながら数回頷く。

渉「いいじゃん、コンサルの花形だよ、新規事業は。エラーできる領域なだけ羨ましい

よ、こっちは線路の上をスケジュール通り
運行する面白みの無い路線だよ」

渉は生焼けの肉にレモン汁をかけ、一
口で肉を食べる。

一方、海斗は取り分けてもらった肉を
数回嗅ぎ、再び金網に乗せる。

海斗は金網に乗せた肉の焼け具合を見
ながら

海斗「でもエラーなんてしたくないものだよ、

普通。28歳にもなって、毎回 WHY、 WHY
と詰められるのは正直嫌気が差す。嫌にな
るよ、全てに理由を求めるのは」

海斗が金網を見続ける一方で、渉は肉
の焼け具合を気に留めることなく、肉
と白米を頬張る。

渉は口内に食べ物を含みながら、箸先
を海斗に向け、

渉「詰められることは別に悪い事じゃない。

仕事柄それはしょうがないものだろ。 WHY
を言語化することで俺たちはお金をもらっ

ているのだから」

海斗は顔を上げ、渉の顔に視線を向ける。

海斗「わかっているよ、わかっているんだけどね。……そうなんだけどね。生きる意味なんか掲げて生きているかって云う話にならない？」

八の字眉の海斗が渉に問う。

渉はお酒を一口含み、海斗の顔を見つめる。

渉は微笑みながら、

渉「そんな詩的に考えて生きていけるほど、世の中甘くないよ。今を生きないと」

海斗は渉に応戦するように、渉と同じ微笑み方をしながら、

海斗「向き不向きはあると思うけど」

渉は引き継ぎ、微笑み、海斗を見つめながら

渉「いいこと教えてあげるよ。詩的に生きていると今が見えなくなり、……肉がこんが

りと焼けてしまう」

海斗は視線を金網に落とし、焦げた肉を目にする。

海斗は肩をガツクリと落とし、

海斗「これが詩的を追い求めた結果か」

その様子を見た渉は、先ほどの微笑み方とは違う微笑みをしながら

渉「同じ部位もう一回頼む？」

メニュー表を手に取りながら海斗に問う渉。

海斗はカリカリになった焦げた肉を一口噛み、渋い表情をしながら、

海斗「お願いできる？」

○広島県尾道市・古びたアパート・お風呂場

(朝・2006年)

お風呂場の開いた小窓から小鳥の嘖りと太陽が昇り始めている様子が確認できる。

狭く深い湯船に、白濁色のお湯が目一

杯入っている。

翠の足元が湯船に入る。同時に、湯船からお湯が溢れる。

口元までお湯に浸かる翠。体育座りをし、しばらくその体勢で固まる。

開いている小窓から寝声気味のカップルの会話が聞こえてくる。

カップル男△の声「もうかえんの？」

カップル女▽の声「ん？帰るよ、何で？」

カップル男△の声「いつもはもうちよつといるじゃん、なんでかえんの？」

翠は息を潜めるように口元までお湯に浸かりながら、聞き耳を立てる。

カップル女▽の声「今日はランチの予定入っているから、帰って準備しないと」

カップル男△の声「うちにある服着ていけばいいじゃん」

カップル女▽の声「それでもいいけど、着たい時に着たいものとかあるでしょ」

カップル男△の声「あるけど、もうちよつと

だけ、ちよつとだけ」

引き続き口元までお湯に浸かる翠。

カップル女△の声「あのさ！もう、ちよつとは嫌なの！」

大声を発するカップル女△。

突然のヒートアップに驚いた翠は、頭

頂部までお湯に浸かり、息を潜める。

頬が大きく膨らむ程の空気を口に溜め、

体育座りをしながら、水中に潜む翠。

10秒ほど水中に潜んだ後、ゆっくりと浮上する翠。

水中から浮上した翠は、髪で目元が隠れ、貞子の様な風貌となっている。

カップル男△の声「オッケー、じゃーね」

小窓に視線を向ける翠。

しばらく静観し、会話が聞こえないことを確認した翠は、水面で口元を震わせ、ぶくぶくと泡を浮かべる。

○広島県尾道市・古びたアパート・中

(朝・2006年)

お風呂から上がった翠はテレビを付ける。

歯磨きをしながら、鍋に水を入れる。

鍋をゴトクに置き、火を付ける。

その後、口元を濯ぎ、冷蔵庫から卵を取り出し、テレビを見ながら、鍋の沸騰具合を確認する。

テレビでは少子高齢化に関する取り組みが行われている。

特集では高齢出産のメリット・デメリットについて説明されており、街頭インタビューが行われている。

テレビ音声「今は女性の独り立ちが当たり前の世の中ですから、若いうちはバリバリ働いた方が生涯年収も高まると思うので、私は今後も当面産む気はないですね」

テレビ音声「やっぱり女性は若いうちが花だと思います。若いうちに結婚して、出産する方が普通に得策だと思いますけどね」

議論百出な様が放映されている一方、翠は沸騰した鍋に卵を入れる。

鍋に卵を入れた後、翠は冷蔵庫から取り出した「1.5L」のペットボトルのコーヒーを口付けで飲む。

鍋とテレビをチラチラと並行しながら確認する翠。

テレビ画面には晩婚化賛成派 33%、否定派 67%の円グラフが示される。

翠「……まあ、関係ないか」

独り言を発した数秒後、何か思い出した表情をする翠。

翠「どこにやったけ？」

翠はしばらくコンロの前から離れる。数秒後、コンロ前に戻ってきた翠の手元にはガラケーが握られている。ガラケー内のメール受信件数を確認する翠。一件のメールが届いている。

○広島県尾道市・古びたアパート・食卓

(朝・2006年)

半分に切られたゆで卵がお皿の上に盛られている。

いずれの卵も完熟である。

翠「んー、上手くないかな」

卵が完熟であることに対してそこまで気に留める様子のない翠。

翠「いただきます」

黙々とゆで卵を口に運び、度々塩を皿全体にかける。

ペットボトルに入っているコーヒーをコップに注ぐ。

注いだコーヒーを2口飲んだ後、机に置かれたガラケーを触り出す翠。

慣れた手つきで、メール受信ボックスを選択し、差出人が樹と書かれたメールを開く。

村上樹 N「2/27、今日も海斗、三太は元気に学校に行きました。二人の最近のブームは鉄棒で連続前回りをする事らしいです。海

斗曰く「腹筋鍛えているから来週には10回
いけるわ」と豪語しています（笑）」

メールを読み終えた翠は穏やか、かつ
朗らかな表情をしている。

翠はガラケー内の返信ボタンを選択
し、返信用文面を書き始める。

○広島県尾道市・古びたアパート・食卓

(朝・2006年)

時計は8時45分を指す。

返信用文面を書き終えた翠は、ガラケ
ーを再び机の上に置く。

立ち上がる翠。

× × × ×

時計は8時55分を指す。

机の上には空になったお皿、ガラケー、
包装を解いたハッピーターン二枚が置
いてある。

体育座りをしている翠は時計を確認す
ると、慣れた手つきでガラケーの通話

アプリを開く。

過去の通話履歴の画面には毎日8時55分に「樹」宛に通話をしている様子が画面より確認できる。

翠は画面一番上の通話履歴をタッチし、電話をかける。

ガラケー音声「プルルルルル」

携帯を耳に当てる翠。

ガラケー音声「ただいま電話に出ることができません。ピーっという発信音の後に、お名前とご用件をお話してください。ピー」

翠「おはよう、今日も見えたよ」

翠は机に視線を向けながら、微笑み、語り出す。

○練馬駅前クリニック・診察室（昼・2024年）

医師（66）に鼻腔のチェックをされている海斗。

医師「おん、これダメだね。まだ忍耐だわ」

鼻腔をチェックし終えた医師はカルテ

に診察結果を書き込む。

医師「これで合っているっけ？」

医師はカルテを隣にいた助手(38)に見せ、

助手「ここesが抜けています」

助手がカルテの誤記を指摘する。

医師「あーそうだ、そうだ。「es」と」

カルテを修正する医師。

海斗は慣れた様子で、医師がカルテを修正し終えるのを待つ。

医師がカルテを修正し終える。

海斗「あの、忍耐ってどれくらいですか？
これ3、4年は忍耐しているつもりです
けど」

医師「あん？3、4年なんて忍耐のうちには
入らないよ。石の上にも3年、他にも
そういうことです」

論すことを諦めた医師は再びカルテに
何かを書き込む。

海斗の態度からは医師を問い詰める様

子が見て取れない。むしろニヤニヤしながら、集会所のおじちゃんに話すように

海斗「どのような病気も3年くらい期間が必要なものですか？」

医師も口調柔らかく、

医師「まあ〇年とかではなく、一生付き合っていくものもありますよ、今回みたいに。即効性のある投薬とかそういう療法は何かしら裏がありますから。じっくりやっつくのが一番ですわ」

医師は薬品名を呟きながらカルテに何かしら書き込む。

医師「あとは、鼻が詰まることでいいこともありますからね。トイレの悪臭が分からないとか、お店で隣に座った娘が臭い時とか、煮付けの醤油臭さが部屋中に蔓延しているのに気づかないとかね？」

海斗「だいぶ限られた話ですけどね」

医師「そうかね？とりあえずお薬出しとくか

ら。ジェネリックでいい？」

海斗「はい、ジェネリックで」

海斗は和やかに返答する。

診療室の扉が閉まる。

○練馬駅前クリニック・待合室（昼・2024年）

クリニック内の待合室では海斗一人だけが待機している。

受付員(22)が海斗に視線を向ける。

受付員「村上さん」

海斗「はい」

海斗が受付へと向かう。

受付員「診察料込みで1690円になります。

領収証は必要ですか？」

海斗「いえ、大丈夫です」

海斗は使い古した財布を漁る。

小銭探しに手間取る海斗。

受付員は間を埋めるため、海斗に話しかける。

受付員「あの一、一つ質問よろしいですか？」

海斗「？なんででしょう？」

受付員の顔を一瞬チラリと見て、再び小銭を探す海斗。

受付員「村上さんはかなり長く当院に通院されていますが何故でしょうか？土曜日なのに毎度空いているこの診療所になぜわざわざいらっしゃるのですか？」

海斗は少し辺りを見渡し後、再び小銭を探す。

受付員は小声で、

受付員「しかも、あの院長ですよ。自分の勤め先を悪く言うのもあれですが、他の診療所へと変えた方が良いのでは？」

海斗は小銭を探し終え、

海斗「すみません、1740円です」

カルトンに沢山の小銭を置く海斗。

受付員「1740円、頂戴します」

指差して受領代金を確認し、レジ作業を行う受付員。

受付員「お釣りの50円です」

カルトンに50円玉を置く受付員。

海斗「ありがとうございます」

海斗はお釣りの50円玉を財布に入れながら

海斗「ここに来た理由は自宅から一番近い場所だったからです。だからここに通院し始めました」

海斗は受付員から手渡しされる領収書、処方箋を受け取る。

海斗「あとはもう、先生の診療に慣れたから他のところに行きづらいかもあるかもしれないですね。おそらくこんなニュアンスのこと言うだろうなと予想して行って、実際言われて、安心みたい。肝心の花粉症は治りそうもないですけど」

鼻を触る海斗。

受付員「そのような経緯だったんですね。すみません、変なこと聞いてしまつて。よろしければ、他の診療所もご紹介しましょうか？そちらの方が結果的には良いかと思う

のですが」

海斗「いえいえ、大丈夫です、お構いなく」

両手で拒否する手振りをする海斗。

海斗は腕時計を見ながら

海斗「すみません診療時間ギリギリに来ちゃ
って」

受付員「いえいえ、とんでもないです。お大
事になさって下さい」

海斗「ありがとうございます、また来ます」

受付員「はい、お大事に」

海斗は受付員に一礼し、病院を出る。

○練馬駅前クリニック・外（昼・2024年）

病院を出てすぐに、ふと思いついた表
情をし、病院の方を振り返る海斗。

海斗「あ……。ま、いつか」

海斗は処方箋を片手に持ち、薬局まで
歩き出す。

○丸の内パークビルディング・オフィス

(朝・2024年)

真剣な眼差しで仕事している海斗。両鼻には、紙縫りが刺さっている。

隣にいる渉は海斗を凝視する。

渉「ギャグ？」

海斗「これがギャグとすれば、センスないでしょ。ギャグとするならば、季節ギャグ」

興味深く海斗の顔を見る渉。一方、海斗は平然とした表情で目の前にある自身のパソコンに目を向けている。

渉「初めて聞く単語だけど、季節ギャグ」

海斗「存じない？季節ギャグとは皆さんご存知、花粉症のことを指します。鼻水が止まらない病です」

海斗は渉の方を向き、紙縫りを更に鼻の奥に突っ込む様子を見せつける。

渉「あー、花粉症ね。俺は気持ちの問題だと思っけどね」

海斗「あー、違うね。花粉症は立派なアレルギーー疾患だから。いい加減認めて」

渉は海斗のデスクに溜められたたくさ
んのティッシュを見て、顔をしかめな
がら、首をひねる。

渉「そんな重度なもの？」

海斗は作業を中断し、渉を見る。

海斗「快眠はできない、味がしない、他にも
喉痛める、風邪引ききやすい、他諸々。こ
れを疾患と言わずなんと言おう？」

渉「そう言う時はよく調べるな」

海斗「リサーチはコンサルの基礎スキル。当
然でしょ」

渉は感心した様子で海斗を見て、自分
の仕事に戻る。

渉が仕事に戻る様子を見て、海斗も自
身の仕事に戻る。

渉「……さっき言った症状の中では、俺は味覚
を感じないことが一番きついな。最近の生
き甲斐はもっぱら焼肉だから」

海斗「それは同感。だから今週は誘わなくて
いいよ。無駄金になる」

涉「了解。今週は大人しく自炊します」

海斗「……それか実家近いから、料理だけ食べに帰ったら？両親も喜ぶでしょ？」

涉「んー、それもいいけどね。懐かしの味を久しぶりに食しに」

海斗「いいな……。実家が焼肉屋」

涉「いいよね、我ながら思うよ。(笑いながら)」

全然味思い出せないけど」

海斗「……そういうもん？」

涉「？そういうもんでしょ？認識できていない原体験って無数にあると思うよ。懐かしの味はまさにその類で」

海斗「そういうものかね。……懐かしの匂いもその類？」

涉「……Yes or Noで言うと、Yesかもね」

互いに自分の仕事に集中する海斗と涉。

涉「そういえば、あんまり村上から家族の話聞かないよな」

海斗は涉からの質問に答える様子はなく、仕事に集中している。

○広島県尾道市・居酒屋「煙」・中

(夜・2006年)

翠は厨房でコップを乾拭きしている。

カウンターに一人で座っているシゲさん(60)が翠に話しかける。

シゲさん「石田ちゃん！石田ちゃん」

カウンターに座るシゲさんに声をかけられた翠は微笑みながらシゲさんの方を向く。

翠「はい、なんでしょう？あと、毎度言いますけど石山です」

シゲさん「あーそうそう！ごめん、ごめん！石山ちゃん。お客さん今日は少ないことだし、一杯奢るから一緒に飲もうよ」

店内はシゲさんを含めた3組と空いている状況。

翠はビールの樽をセッティングしようとしている大将(55)へ視線を向ける。

大将「あーそうだね、今日はもういいよ、上

がって、一緒に飲みな」

翠「ありがとうございます」

翠は拭き終えたコップを指定の位置へと置き、シゲさんの横へと座る。

○広島県尾道市・居酒屋「煙」・中

(夜・2006年)

シゲさん「今日もお疲れさん、乾杯！」

シゲさんは酔っているのかコップから溢れる勢いでビールを注ぐ。

翠「そのくらいで結構です、大丈夫です、大丈夫です」

翠は溢れそうになるビールを溢さないようにとコップを口に寄せ、勢いよく半分くらい飲み干す。

翠は半分くらいビールが残ったコップを両手で持ち上げ、

翠「お疲れ様です。お先に失礼します」

大將に対して挨拶する翠。

大將は翠に応えるように頷く。

挨拶を済ませた翠は、残り半分になつたビールを勢いよく飲み干す。

シゲさん「おーいいね、今日一日頑張った証
拠だ」

翠「いえいえ、注いでくださったビールが
美味しいからです」

翠はお手拭きで口元を拭く。

大将「口だけは達者なんです、こいつ」

大将はにやけながら、串を焼く。

シゲさん「口が上手いに越した事はねーよ。

石山ちゃん、今いくつだっけ？」

翠「今30で、来月31になります」

シゲさん「そう？全然見えないね。まだ20代
でもいけるよ」

翠「本当ですか？いいことなんですかね、私
的にはもう少し威厳さが欲しいですけど」

翠はシゲさんへ質問を投げかけながら、
大将から渡される串盛りを受け取る。

シゲさん「いいことだろ。俺らの年代になれ
ば50も60もそんな見た目変わらないか

ら。若く見られる事なんて、今だけだよ」

翠「そういうものですか？」

シゲさん「そういうもんだよ、ないものねだりなんだよな。世の中全て」

シゲさんは串を一本手に取り、顔を歪めながら食べる。

翠は右上に視線を向ける。

翠「……そういうものですかね」

鼻を吸る翠。その後、皿に盛られた串を手に取り、ゆっくり口元に運ぶ。

シゲさん「大将、千徳もらえるかな？」

大将「何合にしましょう？」

シゲさん「あーじゃ、2で」

大将は注文を受け、厨房の奥へと移動する。

翠は少し思い詰めた表情をし、

翠「シゲさん」

シゲさん「ん？」

シゲさんは呑気な顔をしながら、翠の方を向く。

翠は両手に串を1本ずつ持ち、

翠「ももは好きだけど、かしらは嫌いという

人は、焼き鳥を好きと言えますか？」

シゲさん「何何？もう一回言ってる？」

翠は唾を飲み込む。

翠「ももが好きだと言うことによって、かし

らが好きな人を傷つけますか？」

腕を組むシゲさん。

シゲさん「んー。難しい問いやな」

○鳥取県・鳥取空港・構内（昼・2024年）

鳥取空港構内は沢山の人で溢れている。

○鳥取県・鳥取空港・ロータリー

（昼・2024年）

海斗、ロータリーにて立っている。

ポストンバッグを足元に置き、有線の

イヤホンをし、半透明のサングラスを

している。

ロータリーは車の行き交いが激しい。

黒の車が停車する度に海斗は目元のサングラスを少し下げ、目を細め、運転席を確認する。

その行為を何度か繰り返す。

父娘の通行人少女 ♪ と通行人男 ♪ が海斗の目の前を通り過ぎようとする。

通行人少女 ♪ 「パパ、この人有名な人だよ。

この人。あの朝ご飯作る人」

通行人男 ♪ 「ん？違うよ、似ている人だけど」

海斗は父娘の姿を目で追う。

通行人男 ♪ 「すみません」

父娘が海斗の目の前を通り過ぎた時、通行人男 ♪ が小声で海斗に謝る。

会話を聞いた海斗は機嫌が良くなったのか父娘に向かって、気分がよさそうに手を振る。

車のクラクションが鳴る。

背後から鳴るクラクションに少し驚く海斗。

音の鳴る先を見ると、オレンジ色の

SUVに乗った三井光（28）が運転席で待っている。

海斗は光に向かって片手を上げ、足元に置いてあるボストンバッグを肩にかけ、車へと向かう。

○光の車・車内（昼・2024年）

車内は沈黙状態である。

光は慣れた様子で運転をし、海斗は助手席にて携帯上のマップを見ている。

携帯上のマップと車窓の景色を交互に見る海斗。

窓を開ける海斗。

海斗「ここ前も通ったでしょ？」

光「前通ったかは覚えてないけど、多分通っているはず。ここ家に帰るルートだし」

海斗「多分通っているよ。ほら、ここ右に曲がったら鳥取大学でしょ？」

光「そうそう、よく覚えているね」

海斗「そりゃ覚えているよ、前ここら辺で食

ったカレーうまかったはず」

会話が一区切り終わると、携帯で光の車種を調べ始める海斗。

海斗「やっぱりこの車燃費いいの？」

光「燃費？いや、正直直燃費はあんま変わらないかな。前のもリッター20近くあったし」

海斗「じゃー何が決め手だったの？この車に買い替えた」

光「決め手？んー、鳥取は雪がよく降るからかな。だから、四駆にはしたいと思った。あと、黒だとやっぱり汚れが目立つね」

海斗「なるほど」

海斗は外の景色を眺めながら相槌を打つ。

光「やっぱり都内だと車運転する機会もない？カーシェアとかでも」

海斗「んー、ないね。でも子持ちの先輩とかはやっぱり近場の外出とかでも車に子供乗せたほうが楽だから必須とは言うよね」

光「やっぱそうなるよね。子を持つと。何をやるにも子供が、子供がつてなるからね」

海斗はフロントミラー越しに後部座席にあるチャイルドシートを確認する。

海斗「ミクちゃんは今何しているの？今日一緒におもちゃ買いに行く予定じゃなかったけ？」

光「ああ、今は家で留守番しているよ。ムラおじさん迎えに行ってくるから待っていてねって」

光の発言を聞き、少し驚いた表情をする海斗。

海斗「まだ㊦歳くらいでしょ？」

心配そうに光の顔を見る海斗。

一方で、光は何も問題ないと伝えるかのように表情を変えず、運転する。

光「大丈夫だよ。鍵は閉めてきたし、何回も留守番を経験しているから。あと、もう㊦歳ね」

海斗「㊦歳！早いな。此の間、生まれたばつ

かりに感じるわ」

光「本当に早いだよ。気づいたら服のサイズは大きくなっているし、学費のことを考えなくちゃいけない」

光「あと、意外と子供はすぐ強くなる、親が思っている以上に、早くね。……似て欲しくない方向にも似てしまうけど」

光の口元が緩んでいる。

海斗も口元を緩める。

海斗「やっぱり三井は俺よりも何歩も先を歩いているわ」

海斗は外していたサングラスを再度かける。

光は海斗の発言を聞き、先ほどとは違う口元の緩み方をする。

光「村上も進んではいるでしょ。ベクトルが違うだけで、間違はなく」

海斗「進んではいるかもね。180度方向は違うかもだけど」

光「それも進行の一つではあるから」

沈黙の空間が少し流れる。その後、二人は同時にあくびをする。

車窓から見える桜の木は満開を終え、緑の葉が実り始めようとしている。

海斗「音楽流していい？」

光「いいよ」

海斗「なんかGWっぽい歌流したいな」

光「(笑いながら) そんな曲ある？」

○白壁のワンルーム・中(翠の夢)

白壁の部屋に一つのドレッサーが置かれている。

クリーム色に近い白色で、少しビンテージさを感じさせるドレッサーだ。

ドレッサーの前で一人の女性が座り、化粧をし始める。

その女性はとても華奢で、背中がぱっくりと空いたドレスを着ている。

背中しか見えていないが、慣れた手つきで化粧品を選び、スピーディーに仕

上げていく。

ドレッサーの横にはベビーベッドや知育グッズが収納された収納ケースがある。

ケースに入っている知育グッズのいくつかは色がはげており、色褪せた状態だ。

ドレッサー前に座る女性は、目の前にあるu.s個のイヤリングを吟味する。

u.s個のイヤリングの内、女性は最も派手な一つを選び、鏡を見ながらイヤリングを着ける。

イヤリングを着け終えた後、仕上げに香水を4.5プッシュほど全身にかけ、髪を靡かせる。

支度を終えた女性は立ち上がり、ドレッサーの前から去る。

○広島県尾道市・古びたアパート・中

(昼・2006年)

翠が目を覚ます。

太陽の光が窓から煌々と差し込んでくる。

寝相が悪かったのか、掛け布団は翠の体に掛かっていない。

寝起き後、数秒間放心状態の翠。

しばらくして寒さを感じ始めたのか足元にある掛け布団を手に取り、再び就寝態勢へと入る翠。

寝床に再び入った後、魔された様な表情をしつつ、小さなあくびをする翠。

二度寝しようとする翠。

しばらくじっとする翠だが、眩しいのか目元まで布団をかける。

時計の針は11時を示す。

目元まで布団をかけ、じっとしている翠。

数秒後、インターホンの音が部屋に鳴り響く。

宅配員「すみません。ヤマトです」

○大通り沿いの玩具屋・中（昼・2024年）

空のショッピングカートを手斗が押し
ている。

そのショッピングカートの下には三井
ミク（6）が座っている。

土日にも関わらず、玩具屋は空いてお
り、手斗と光が横並びになっても迷惑
になっていない。

ミク「ここを右」

手斗「右ね」

ミクは馴染みの道を案内するかのよう
に手斗へと指示を出す。

案内をするミクの眼差しは純粹無垢そ
のものであり、輝いている。

手斗はカートの下から聞こえてくるミ
クの案内に従い、遠心力が働かないよ
う、大回りに右折する。

光は大回りするカートが周囲の邪魔に
なっていないか後方を確認する。

ミク「でね、でね、あそこの3の看板の所」

ミクは興奮気味に看板を指差し、海斗へ指示をする。

海斗「あそこのωね。かしこまりました、安全運転で参ります」

海斗はタクシー運転手のような口調で返答し、ゆっくりとカートを押す。

○大通り沿いの玩具屋・中（昼・2024年）

ミクを乗せたカートと海斗、光はωと書かれた看板下に到着する。

到着した瞬間ミクはカートから降り、目当ての商品に向かって駆け足で向かう。

海斗と光はミクの後を追うように、急がずゆっくりと歩く。

海斗「そんなに欲しいものあるの？」

光「俺も全然把握していない。一ヶ月前ここに来た時から、目を付けていたらしい」
ミクちゃん「これこれ」

一足先に目当ての商品に辿り着いたミクは、ゆっくり歩いている海斗、光を急かすように手招きする。

海斗「6歳児向けのおもちゃね……」

海斗は独り言を発しながら、周辺のおもちゃを見渡す。

海斗と光はようやくミクの元に到着し、ミクが指差す商品に目を向ける。

海斗「おままごとキッチンセットシミュレーションミスト」

海斗は商品に目を向けながら、パッケージに記されている商品名を声に出して読む。

海斗はその商品を手に取り、対象年齢を確認する。そこには6歳以上と記載がある。

その文字を確認した海斗は、一度光の顔を確認し、その後ミクの顔を確認する。

光の眉は少し下がっており、ミクの目

はキラキラと輝いている。

海斗は∞度ほど光の表情とミクの表情を交互に確認した後、ミクと同じ目線で話すため、しやがみ込む。

海斗「ミクちゃん、どうしてもこれが欲しいの？」

海斗は柔らかい口調でミクに問いかける。

ミク「うん！」

ミクは迷いなく首を縦に振る。

海斗「でもこれ∞歳って書いてあるよ、ミクちゃんにとってはそんな面白いものじゃないかもしれないよ」

海斗はパッケージに記載されている対象年齢記載箇所をミクに見せる。

ミク「うん、いいよ。これがいいから」

海斗は口を真一文字にし、再び光の顔を確認する。

光の眉は普通に戻っており、納得感のある表情をしていた。

海斗の口は引き続き真一文字の状態であるが、ゆっくりと首を縦に振る。

海斗「……OK。これを買おうか！」

ミク「やったー」

ミクは海斗の手にある商品を取り上げ、自分の手でショッピングカートに入れようとする。

光はミクが商品をカートに入れたことを確認し、カートを押し始めようとする。

ミク「待って、待って」

ミクは再び、ショッピングカートの下段に乗り込もうとする。

ミクを乗せたショッピングカートを光は押し始める。

考え事をしている表情の海斗。

ショッピングカートが進み始める最中、海斗は辺りの棚を見渡し、周辺商品を確認する。

周辺商品のうち、LEGOが目にとまり、

海斗は手にとる。

LEGOのパッケージを確認する海斗。

ミク「おじさん」

遠く離れたショッピングカートから海斗を手招きするミク。

海斗「ごめん、ごめん」

海斗は駆け足で二人の元へと向かう。

○広島県尾道市・古びたアパート・中

(昼・2006年)

ヤマトによって配達された段ボールを開ける翠。

中には、一通の手紙と Dior の香水

「J'adore」が入っている。

手紙の書き出しには、不恰好な文字で「ママへ」と記されている。

○鳥取県鳥取市・中層マンション・三井家・

寝室 (夜・2024年)

海斗に買って貰ったおもちゃを抱き抱

えながら、ミクが寝ている。

○鳥取県鳥取市・中層マンション・三井家・

リビング（夜・2024年）

テーブルにはワインボトル1本と、缶ビール4本が既に空いている。

海斗と光は酩酊しており、笑顔が絶えない様子である。

海斗「（笑いながら）ちょっと待って。ここ、ここがいいんだよ」

海斗は自身のスマホをテレビにミラーリングし、動画を投影している。シートカバーをいじり、動画を早送りする海斗。

停止した画面には高校時代の文化祭にて催した劇の一幕が流れている。

光「あー懐かし」

光と海斗は笑顔で、テレビを見る。

光「いやーこん時はマジで頑張ったね、自分で言うのも何だけど」

海斗「ね！これ書いたの、三井だもんね。すごいよな、普通に完成度高いし。才能あつたんじゃない？こういうのを書く」

海斗は光に向かって、感嘆した表情を見せる。

光「（苦笑しながら）過去形かよ。大丈夫、安心して。自分が一番わかっている」

光は手元にある缶ビールを勢いよく飲む。

光「……そんな中坊が今や大人になって、就職して。気づいたら10年経って、子供もできちゃって」

光は過去を振り返りながら、寝室の方に視線を向ける。

海斗も同じく寝室に視線を向ける。

数秒間、沈黙が生まれる。

光は再び缶ビールを一口飲む。

海斗「……俺って決断力ある？」

海斗の方を向く光。

海斗はわざと視線を合わせずに、

海斗「馴染みの匂いの話。前に俺に言ってくれた事、覚えている？」

海斗は立ち上がり、冷蔵庫から新たに缶ビールを取り出す。

海斗はビールの缶を開け、

海斗「正直、あの時、すでにそんなに感じ取れなかった。今はもつと、更に感じとれていないかな」

海斗は開けたばかりの缶ビールを勢いよく飲む。

光も一口ビールを飲み、

光「ちなみに俺も最近、感じとれていないよ。

「ご存じ、決断力もないし」

光は手に持った缶ビールじっくりと見つめる。その後、缶口の匂いを嗅ぐ。

光「何なら得意？」

海斗「(しばらく天井を見上げ) ビールの匂いでかき消すことは得意かもね」

海斗は苦笑いしながら、もう一口ビールを飲む。

○鳥取県鳥取市・中層マンション・三井家・
リビング（夜・2024年）

テーブルの上にあるビールの空き缶が
8本になっている。

海斗はソファに座りながら、テレビに
視線を向けている。

一方、光はソファで寝落ちしている。

海斗の視線の先にあるテレビ画面には
光の携帯をミラーリングした画面が写
っており、携帯のスライドショー機能
が画面に写っている。

スライドショーでは光、ミク、奥さん
である三井麻奈(23)の3人が写った画
像が次々と流れている。①海辺での写
真、②公園での写真、③入園式の写真、
④USJへ行った時の写真。

海斗は真剣な表情でテレビ画面を見つ
める。

× × × × ×

光は寝息を立てながら、ソファで寝落ちしている。

スライドショーではミク単体の写真が多くなっている。①おもちゃで遊ぶミク、②虫取りをするミク、③保育園の運動会で走るミク、④鳥取砂丘の丘で一人佇むミク、⑤台所に立つミク、⑥美味しそうにごはんを食べるミク。

海斗、光の様子を見る。

光は変わらず、右手に携帯を持ってまま、ソファで寝落ちしている。

海斗はソファから立ち上がる。

○鳥取県鳥取市・中層マンション・三井家・

ベランダ（夜・2024年）

ベランダへと出た海斗。

ベランダから見える景色は鳥取市中心部の一部を映し、家屋から灯りがポツポツと点っている。

程よく夜風が吹き、海斗の髪が少し乱

れる。

エアコン室外機の上に置いている観葉植物の葉もゆらゆらと揺れている。

手すりに肘を掛け、しばらく佇む海斗。

ポケットからスマホを取り出し、写真フォルダを開く海斗。

写真フォルダを上へスクロールする海斗。何度も、何度も、何度もスクロールする海斗。

写真フォルダの最上部までスクロールし終えた海斗。

最も古い写真をタップすると、そこには 2016 年 12 月 3 日、友人と US1 に行った時の写真が記録されている。

写真一覧画面へと戻り、より古い写真を見ようと再び何度スクロールを行うが、より古い写真は画面上に表示されない。

リビングの方を振り向く海斗。その後、息を大きく吸い込み、秒間息を止め、

目を閉じる。

○広島県尾道市・古びたアパート・中

(昼・2006年)

翠の後ろ姿からは手紙をじっくりと時間にかけて読み込む姿が見てとれる。後ろ姿からは笑ったり、鼻を吸ったり、上を向いたりする様子が見てとれる。

× × × ×

翠の足元には丸められたティッシュが3個ほど転がっている。

手紙を読み終え、折り畳む翠。

その後、手紙と同封されていた香水を手にとる翠。

香水のラベルを親指でなぞり、手首に2回プッシュする。

○広島県尾道市・古びたアパート・中

(昼・2007年)

以前、翠の夢で出てきたドレッサーが

翠の部屋の一角にある。

そのドレッサーの上に2個の香水が置かれてある。一つは「J'adore」、もう一つは「Eau sauvage」。

石山翠(31)がドレッサーの前に立つ。

ドレッサーに新たな香水「FOREVER

AND EVER」を置く。

時計が8時55分を示す。

翠の声「もしもし、新しいのありがとうね」

○山陽新幹線・外(昼・2024年)

山陽新幹線が田園風景の中を走る。

○山陽新幹線・内(昼・2024年)

座席には海斗が座っている。

車窓から見える田園風景を眺める海斗。

座席目の前の簡易テーブル上には 5/29'

走行区間：東京↓福山と記載された EX

ご利用表が置かれている。

○広島県尾道市・海斗の実家・台所

(夜・2024年)

シンク前で水を飲んでいる海斗。

村上三太(三太)がバスタオルで頭を拭き

ながら、冷蔵庫を開ける。

三太「いつ東京に帰るんだっけ？」

海斗「明後日」

三太「はや」

冷蔵庫から高タンパクの紙パック飲料
を取り出す三太。ストローを紙パック
に刺し、飲み始める。

三太「滞在期間の予定は？何しに帰ってきた
んだっけ？」

海斗、コップに注いである水を飲み干
し、シンクでコップを洗い出す。

海斗「ん？特にないけど？」

三太「ん？ないの？」

三太、少し驚いた表情をする。

海斗はコップを洗いながら三太の方を
向き、

海斗「何？俺に実家に帰ってきて欲しくなかった？」

三太「ちげーよ、帰ってくるなら理由があるかと思って聞いただけだよ」

三太は平然とした表情で、紙パックを引き続き飲む。

三太は台所から出ていく途中、小声で、
三太「……計画性ないな、相変わらず」

海斗は反射的に振り向き、少し声を張りながら

海斗「余計なお世話や」

○広島県尾道市・海斗の実家・屋根裏

(夜・2024年)

海斗、スマートフォンのライト機能を付け、真っ暗な屋根裏に入って来る。
屋根裏には大量の段ボールが積み上げられている。

ダンボールにはマジックペンで「カイト教科書類」、「サンタゲーム類」など

の文字が書かれている。

屋根裏の角には古びたドレッサーが置いてある。鏡は取り外され、塗料も一部はげた古びたドレッサーだ。

海斗はドレッサーにかかっている埃を祓うため、「ふう」と息を吹きかける。埃が飛沫する。

海斗、少し咳をこむ。その後、ドレッサーに付いている引き出しに目線を向ける。

引き出しの上段を開ける海斗。中には何も入っていない。

引き出しを閉める。

2段目を開ける海斗。中には沢山の香水が入っている。

海斗は少し微笑みながら、引き出しを閉める。

3段目を開ける海斗。中には、ガラケーと充電器が入っている。

海斗は、1台のガラケーと充電器の充電

器を手取る。

○広島県尾道市・海斗の実家・ベランダ

(夜・2024年)

野晒しに置かれているサンダルを足で
引き寄せ、ベランダへと出てきた海
斗。

手すりに肘をかけ、一点を凝視するの
ではなく、吟味する様に辺りの景色を
眺める海斗。

海斗の眼には荒れた海、土砂崩れの危
険性がある雑木林が写っている。

海斗は手すりに肘をかけたまま、腕に
顔を埋める。

海斗「……………」

海斗は顔を埋めながら、深いため息を
吐く。

× × × × ×

ポケットからパイプ音がする。

ポケットを漁る海斗。ポケットから取

り出したものは1口の充電器である。
海斗は「違う」と小声で発しながら、
もう一度ポケットを漁り、スマホを取り出す。

海斗、充電器を別ポケットへと入れる。
スマホのホーム画面には、
ホーム画面の通知「台風〇号、本日午後10時に本州到達予定」

画面を見た後、しばらく海を見つめる
海斗。
再びスマホのホーム画面を確認する海斗。

確認した後、海斗はベランダから出る。

○広島県尾道市・海斗の実家・ベランダ

(夜・2024年)

満月が煌々と輝いている。

波は先ほどよりも荒れ、雑木林から聞こえる葉の擦れた音は先程よりも大きくなっている。

海斗、ガラケーを手に持っている。

海斗は遠くを眺めながら、持っているガラケーをパカパカと数回開いては閉じる。

海斗、ガラケーを鼻元に寄せ、ガラケーの匂いをゆっくり嗅ぐ。

海斗「(微笑みながら) Eau savag っぽいな」

海斗はガラケーの電源を入れる。

○広島県尾道市・古びたアパート・食卓

(朝・2006年)

食卓にある椅子に体育座りしながら、ガラケーを眺める翠。

海斗 N「2006/10/2。以前、美術の時間で書いた絵がなんと MOA 児童コンクールにて入賞しました。ただ、当の本人は「何で賞、取れたんやろう？」と疑問がっていました」

翠「すごっ！…覚醒遺伝？」

○広島県尾道市・古びたアパート・洗面所

(朝・2007年)

ドライヤーをかけながら、ガラケーを眺める石山翠(31)。

海斗N「2007/8/2。昨日行われた三者面談にて担任先生から「海斗君はチャレンジ精神旺盛な子です。難しい方が、やり甲斐があつていいと言う発言は私にも響くものでした」と感激されてましたよ」

翠「……私の血筋かな？」

○広島県尾道市・古びたアパート・玄関

前(朝・2008年)

玄関を開けながら、ガラケーを見る石山翠(32)。

海斗N「2008/5/10。子供というもの？いや村上海斗という人間は非常に怖いものですね。何でうちは別居状態なのか？仲が悪くないのに何で離れ離れなのか？彼が腹落ちできる回答を私はまだ持っていない。」

翠「……」

○広島県尾道市・古びたアパート・お風呂場
(朝・2009年)

湯船に浸かりながら、ジップロックに入
ったガラケーを眺める石山翠(33)。

海斗 N「2009/12/24。子供達はもう大人です。

この一年で海斗は価値観と云うものを、三
太は道理を学んでいました。父として彼ら
にプレゼントをあげる立場の私が逆にプレ
ゼントをもらってしまいました。情けない」

○広島県尾道市・海斗の実家・ベランダ

(夜・2024年)

ベランダの格子に肘を掛けながら、ガ
ラケーを眺める海斗。

海斗「…今日はフラインプレー連発」

海斗「…中学受験を決意」

海斗「…忍耐力がないと嘆き」

海斗「…将来の夢は公務員と文集に記載」

過去を振り返るように、ゆっくりと間

隔を開けながら読み上げる海斗。

海斗「…嫁、姑問題に苦言を呈す海斗」

海斗「…父を罵倒、いや海斗は当たり前のことと言ったまで」

海斗「…父親は母親にはなれないのか」

過去を悲しむように、ゆっくりと間隔を開けながら読み上げる海斗。

○広島県尾道市・海斗の実家・ベランダ

(夜・2024年)

暴風が吹きあれ、雨も降り始めた。

海もひどく荒れ、雑木林はグラグラと揺れている。

辺りは波音と雨音が響き渡る。

雨で少し濡れている海斗。

海斗は左手にガラケーを持ち、右手にスマホを持っている。左手にあるガラケーは閉じたまま、右手にあるスマホにて、フリック入力を行っている。スマホ上のメール文面「5/29。私はあ

まり食べたことのないあなたの懐かしの味を食べたいです」

海斗の手元はフリック入力をしている。

スマホ上のメール文面「5/29。私の絵を見た、あなたの表情が見たいです」
雨に打たれる海斗。

スマホ上のメール文面「5/29。私が頑張る様は、あなたを鼓舞し、伝染させる事ができますでしょうか？」

波が荒れ狂う様子。

スマホ上のメール文面「5/29。私が興奮している姿をあなたに見て欲しかったです」

フリック入力をしようとするが、スマホが雨で濡れ、うまく入力ができ
いない。

ずぶ濡れの海斗。

海斗 M「5/29。私は、私の匂いを知りません」

ずぶ濡れ、かつ苦虫を噛み潰した表情の海斗。

タイトル「5/29」。私はあなたにどの様な匂いを綴ったのでしょうか？」
スマホ上の送信表示を押す海斗の手元。

○鳥取県鳥取市・中層マンション・三井家・
リビング（昼・2024年）

光が段ボールを抱え、リビングへと運んで来る。

ミクは段ボールの元へと走って駆け寄る。

ミク「何これ？」

目を輝かせ、光に問うミク。

光「何だろうね？」

光が段ボールを開ける。

ミクが段ボールを覗き込む。

段ボールの中には、一通の手紙とおま
まごとセット、そしてハッピーター
ンが入っている。

（了）

